

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02693

研究課題名（和文）極小規模保育所等で活用できる運動遊びの開発

研究課題名（英文）Development of physical activity games that can be utilized in small-scale childcare facilities.

研究代表者

高瀬 淳也（Takase, Junya）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60780418

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、極小規模の保育所を対象に、少人数の環境で多様な動きを身に付ける遊びを開発し、小規模保育機関における運動遊びの体系化を目指した。

極小規模保育所における自由遊びの調査から、少人数のために友達との交流が限られており、それが要因となって、運動遊びの発展や深化が困難な状況が明らかとなった。しかし、環境によって少人数でも様々な動きが発現する可能性が示唆された。この調査結果を踏まえ、友達との協力や新しい動きを経験できるように環境設定の工夫に重点を置き運動遊びの開発に取り組んだ。開発した遊びによって、「よける」や「かわす」といった動きの発現につながるなどの成果が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国では人口減少と少子化が進み、2053年には総人口が1億人を下回る予測もある。過疎地域では極小規模保育所が定員割れを起こす状況が見られるが、全幼児が10名程度でも認可外保育所として存続している地域も少なくない。しかし、これらの機関に関する研究は、社会的アプローチが主流となっており、少人数でどのような保育・教育を展開していくとよいかという知見が不足している実態がある。このことから、本研究における極小規模保育所における運動遊びの開発や幼児期から児童期にかけての運動遊び・運動指導の体系化は、少子化が進む我が国にとって有益な情報となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop play activities that enable children in extremely small-scale childcare centers to acquire a wide range of movements and to systematize physical activities in small-scale childcare institutions. A survey of free play in extremely small-scale childcare centers revealed limited interaction among children due to the small group size, which hindered the development and diversification of physical activities. However, the results also suggested that various movements can still occur even with a small number of children depending on the environment. Based on these findings, we focused on creating an environment that facilitates cooperation among friends and allows for the experience of new movements, and we worked on the development of physical play activities. The developed activities showed positive outcomes, such as the emergence of movements like dodging and evading.

研究分野：体育科教育学

キーワード：極小規模保育所 運動遊び 少人数

## 1. 研究開始当初の背景

我が国は、人口減少と少子化が進展し、令和 35 年(2053 年)には総人口が 1 億人を下回るという予測がある(国立社会保険・人口問題研究所, 2017)。都市部では、待機児童の問題で保育所不足が取り上げられる一方、人口減少の著しい地域では、定員割れを起こす極小規模保育所等も見られている。このような保育所等は、採算性の観点から統廃合が進められるものの、へき地や離島などの過疎地域では、保育機関が皆無になることを避けるため、全幼児が 10 名程度でも認可外保育所として存続させる地域も見られる。

極小規模保育所等で最も懸念されることは、運動遊びに適した人数を確保しにくいことである。幼児期は、友達をモデルに動きを真似したり、イメージを共有させ協力・分担したりなど、友達とのかかわりを通して、運動遊びを発展、深化させていく時期である。しかし、この時期に同年齢や前後の学年の友達が極めて少ないと、個々の遊びが多くなり、遊びの種類にも偏りが生じてしまうなど、運動遊びが発展せず、多様な動きを経験させられないことが懸念される。また、極小規模保育所等を卒園した幼児のほとんどは、近隣の小学校へ進学する。その小学校も小規模化していることが多く、体育の授業で協同・協力してプレイする集団技能の学習に制約が生じることもある。つまり、極小規模保育所等を有する地域では、幼児期に多様な動きや集団遊びの経験が少なく、小学校進学後も集団学習に制約が生じるなど、常に集団をベースとした活動に支障が生じていると言える。このような状況下では、保育所と小学校が連携し、意図的・計画的に、友達と協同・協力が必要な運動遊びや体育授業を実践していくことが重要である。

そこで、平成 29 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)の助成を受けて、小規模小学校を対象に、体育のボールを使ったゲームの学習領域(以降、ボールゲーム領域)の教材開発を行った。この研究では、児童数と発達段階に合わせて用具やルールなどを工夫する「ゲームの簡易化」と、中心的な戦術的課題をクローズアップする「課題の焦点化」によって、少人数学級でも集団技能の学習が十分に可能であることを明らかにした(高瀬ほか, 2018 など)。一方で、少人数学級でも幼児期から低学年までの集団遊びの経験が、ボールゲームなど集団学習に影響が大きいことが示唆され、幼児期の運動遊びと小学校体育授業との接続に重点を置き研究を継続することで、さらに多くの知見が得られると考えられた。

現在、全国の市町村の約半数は過疎地域に該当しており、上述のような小規模化した保育・教育機関を有する地域が、今後も増加すると予想される。少人数の保育・教育をどのように展開していくとよいか、特に遊びが生活の主体である保育所等の現場において、少人数の友達とのかかわりの中で運動遊びをどのように充実させていくかが、喫緊の課題と言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の 2 点である。

幼児期の少人数の環境下において、友達と協同・協力しながら多様な動きを身に付けられる運動遊びを開発する。

本研究で開発した運動遊び、及び平成 29 年度からの研究で開発した体育教材をもとに、小規模の保育・教育機関を対象にした幼児期から児童期にかけての運動遊び・運動指導の体系化を試み、現場に有効な資料を提示する。

なお、平成 29 年度の研究に引き続き、本研究においてもボールゲーム領域への接続に視点を当てる。ボールゲーム領域では、投げる、蹴るなどの「ボール操作」と、仲間と連携してボールを相手コートに運ぶなどの「ボールを持たないときの動き」という 2 つの技能の習得が求められている。特に後者の技能は、味方をサポートしたり、相手がいないところを見つけて移動したりなど、他者の動きに合わせて自分の動きを選択してプレイすることが求められる。この技能は、幼児期に友達とイメージや目的を共有しながら協力して遊ぶ経験が重要である。極小規模保育所等のように限られた人数では、集団遊びが経験しにくいことから、この領域につながる運動遊びの開発が特に必要と考え、取り上げることにした。

これまで幼児の運動遊びに関連した市販本が多く発行されており、年齢別に多様な運動遊びが掲載されている。内容を見ると、年齢の進行とともに多人数での遊びの紹介ページが増加しており、5 歳児になると極小規模保育所等では取り組めない多人数の遊びが大半を占める本もある。また、保育所保育指針や幼稚園教育要領等、省庁から発刊されるものの多くは、定員を満たしていることを前提に示されている。このようなことから、へき地や離島などの過疎地域にある保育・教育機関を対象にした情報は、特に不足していると言える。

また、定員を満たしていない保育・教育機関は、将来的に統廃合される可能性が高い。このため、これらの機関を対象にした研究は、統廃合がもたらす地域への影響など社会的なアプローチが多く、極小規模保育所等の保育内容や小規模小学校の授業実践に関する調査は、ほとんど行

われてきていない。このことから、本研究で行う運動遊びの開発や幼児期から児童期にかけての運動遊び・運動指導の体系化は、小規模化した保育・教育機関をはじめ、少子化が進展する我が国にとって有益な情報となることが期待できる。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下のような3年間で計画した。

#### (令和2年度) 極小規模保育所等における運動遊びの実態調査

研究協力の承諾を得ている保育所を訪問し、登園後から朝の集いが始まるまでの自由遊びの時間帯を対象に調査を行う。具体的には、保育所の施設の遊戯場(体育館)または園庭を4方向から撮影し、その映像から、年齢、遊びの内容、一緒に遊んでいる人数、継続時間について調べる。対象年齢は、友達への興味が強くなり、関わりが広がってくる3歳児以降とする。あわせて、保育者へのインタビューによって、幼児の興味関心や、年齢の進行に伴う運動遊びの変容についても調査していく。

#### (令和3年度) ボールゲーム領域への接続を目指した運動遊びの開発

運動遊びの開発では、「どのような運動感覚や動き方を芽生えさせると、後の運動学習に有用に働くのか」というボトムアップの視点(渡辺, 2018)を重視していく。例えば、サッカーのように攻守が入り交じりながら行うゲーム(ゴール型)において「ボールを持たないときの動き」の一つに、パスを受けるために空きスペースを見つけて移動する動きがある。そこで、近くに鬼がいらない目標物に向かって走る、一人が囷になって鬼を引き付けその間に他の子が逃げる、などの要素を取り入れた少人数でもできる鬼遊びを開発する。これらの鬼遊びによって、「鬼のいないところを見つけて逃げる動き」を身に付け、小学3年生以降の空いている場所に素早く移動するなど「ボールを持たないときの動き」の学習に接続することを目指していく。運動遊びは、3名(同学年、異学年各1名+保育者1名)を想定し、ルールの複雑さなどからどの年齢に適した運動遊びかを検討し、体系化を目指す。

#### (令和4年度) 開発した運動遊び、運動遊び・運動指導の体系化の検証及び成果の公表

令和3年度までに開発した運動遊び、運動遊び・運動指導の体系化したものを、研究協力の承諾を得ている保育園等や小学校にて実践し、評価、改善をしていく。その後、運動遊びの詳細を冊子に、運動遊び・運動指導の体系化をリーフレットにそれぞれまとめ、研修会等に参加した折に配布するなど、積極的に研究成果を保育・教育現場に還元していく。

### 4. 研究成果

本研究では、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、調査を依頼していた保育所等の休園措置により、予定していた調査や実践が延期・中止が多くあった。このため、実態調査が令和4年度にも行う状況となった。このため、本研究で予定していた「運動遊び、運動指導の体系化」については、期間中に十分な実践データを集められないことが予想されたため、攻守入り混じって行うゲーム(ゴール型)に絞って体系化を目指した。なお、令和5年6月段階でもデータの収集は行っており、今後、論文等の発表を予定している。

#### (1) 極小規模保育所等における運動遊びの実態調査

この調査では、幼児が登所してから遊戯場の片付けが始まるまでの時間の30分間(9時10分から9時40分)を対象にした。撮影は、遊戯場で自由遊びをする幼児を4台のビデオカメラで行った。ビデオカメラの設置場所は、対象児の自由遊びの妨げにならないよう保育者と相談して遊戯場の四つ角に設置した。また、死角が出ないようにそれぞれのビデオカメラの向きや角度を調整した。この方法で撮影した映像を用いて行動観察を行った。出現した動作のカウントは、4台のビデオカメラの映像を観察し、遊びの中の動作が吉田(2005)の基本動作42種のどれと合致するかを検討し、時系列にそって記録しカウントした(高瀬他(2022), 高瀬他(2023))。

この調査では、新型コロナウイルス感染症の予防策として保育所では外部者の立ち入りを禁止する時期があり、ビデオの設置調査のために保育園に訪問することができないことがあった。このため、ビデオカメラの角度調整がうまくいかず死角ができてしまい、調査のやり直しを複数回行うこともあった。また、対象幼児が欠席をして調査が延期になることもあり、1つの保育所では調査対象児から除外する措置をとった。

5歳男児1名、4歳児男女1名ずつのA保育所

「たつ」「はしる」「あるく」「のぼる」の動作は、対象幼児3名とも多く出現していた。これらの動作は保育所の規模を問わず、幼児にとって多い動作と考えられる。その一方で、複数あるいは集団遊びのような場面で見られる「くむ」「かわす」「かくれる」などの動作は、ほとんど見ることがなく、少人数の影響によるものと考えられた。また、「なげる」「とる」「ける」「かわす」のような動作もほとんど出現がなかった。

この保育所では、対象保育所に設置されている遊具や保育士の積極的なはたらきかけによ

て、幼児の動作の出現を促すことができおり、極小規模保育所における環境設定の重要性が改めて示唆された。

#### 5歳児2名、4歳児3名のB保育所

B保育所の対象幼児の5人は、「たつ」「あるく」「はしる」が共通して多く見られた。これは、遊具やおもちゃのある場所へ移動したり、他の遊びに移る際に行われたものである。また、「のぼる」「とぶ」が多かったのは、対象保育所に設置してあった複合遊具（滑り台）や縄跳びを使って遊ぶことが多かったからと考えられる。このように幼児たちは、自分が楽しめる活動に従事していると考えられる。しかし、特に5人が一緒に遊ぶことがほとんどなく、個々で遊ぶ様子が多く見られていた。このように少人数で遊んでいるため、一人遊びが多く、友達との交流を深めながら、遊びが発展していく「平行遊び」から「連合遊び」「組織的な遊び」へと移行することが難しい状況がうかがえた。

#### 5歳児2名のC保育所

C保育所の5歳児2名は、一緒に遊ぶことが多かったため遊びの頻度や種類のカウント数が似た数値であった。特に2日目は、保育所と3人で縄跳びをして遊んでおり、同じ動きを繰り返していたため、縄跳びを使って遊ぶ場面の「とぶ」、順番を待つためにステージに移動する際の「のぼる」動作のカウント数が多く見られた。その他、ウレタン積み木を使った遊びが多く見られ、男女ともに、「もつ」「はこぶ」「つむ」動作が多く見られた。

の調査から、同年齢や前後の年齢に友達が少ない分、一人や少人数で遊ぶことが多く、自由遊びの中で基本的な動作の種類や頻度が乏しくなることが明らかとなった。一方で、遊具を使った遊びで様々な動きが見られており、一人遊びでも、環境の工夫によって多様な動きの発現につなげる可能性が示唆された。

極小規模保育所に勤務する保育士へのインタビューでは、少人数であるため、幼児に声をかけ一緒に遊ぶ中で、遊びの種類を増やすように心がけているものの、どうしてもできない遊びもあり難しさを感じているという意見が多く聞かれた。また、極小規模保育所の多くは、異年齢保育が行われているため、2歳児と5歳児が一緒に空間で遊ぶこともあり、安全面を配慮すると年齢の小さい幼児に目が行ってしまい、年長児と関わる時間が少なくなる傾向にあることも明らかとなった。

### (2) 極小規模保育所等における運動遊びの開発及びその体系化

3つの実態調査を通じて、極小規模保育所では個々が自分の好きな遊びをして過ごすには適した環境である反面、同年齢の友達と一緒に遊びながら遊びを発展させ、そこからこれまで経験したことのない動きをする経験が少ないことが明らかとなった。特に、今回対象の保育所では、鬼ごっこをして遊ぶことがほとんど見られず、時折追いかけっこが見られたものの、遊戯場を周回する様子が多く、相手(鬼)の動きを見て「よける」や「かわす」という動きは発現しなかった。

小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省,2018)において、低学年の体育授業で行われるゲーム領域 鬼遊びの例示には、「相手(鬼)のいない場所に移動したり、駆け込んだりすること」「少人数で連携して相手(鬼)をかわしたり、走り抜けたりすること」と示されている。このことから、極小規模保育所において「よける」や「かわす」動きが発現される遊びを中心に以下の遊びに取り組んできた。

#### エアサンドバックを利用した鬼遊び

図1のようなエアサンドバックを遊戯場に設置した。その結果、遊戯場を移動する際に、エアサンドバックにわざとにぶつかったり、揺らしたエアサンドバックをよけたりなどの動きが見られるようになった。エアサンドバックが置いてある環境に慣れたところに、保育士が鬼となつての追いかけっこに取り組んだ。幼児は、鬼から逃げる際にも、エアサンドバックをよけたり、エアサンドバックをきっかけに走る方向を変えるなどの動きが見られた。



図1 エアサンドバックをよけながら走る子どもたち

#### バランスボールを使った転がしドッジボール

直径約65cmのバランスボールを転がし、それに当たらないような「転がしドッジボール」で遊びを考えた。遊戯場に一边が5~6mとなる四角形を描き、その中でボールに当たらないように逃げるようにした。ボールは保育士が転がすようにし、年齢の低い幼児の安全面も配慮するようにした。年中児、年長児は次第に転がってくるボールに体を向け、ボールの動きに合わせて「よける」「かわす」という動きが見られるようになった。



### 引っ越し鬼

人数分の目印（本研究では CD に滑り止めを貼り付けたものを使用）を準備し，図 2 のように立たせ，太鼓の合図で一斉に別の目印に移動するようにした。このことによって，人のいない目印を見つけて移動する動きを身に付けられることを目指した。目印に乗っていない幼児を保育士が追いかけることで鬼遊びの要素を加えたことにより，幼児は少人数でも空いた場所を見つけて移動することができるようになった。

### スポンジボール合戦

調査でボールを投げる遊びが少なかったことから，片手で握ることができる大きさのスポンジボールを大量に用意し，保育者も含めて雪合戦のように互いにぶつけあう遊びを行うようにした。ボールが大量にあるため，拾って投げることを繰り返すことができ，保育士に向かって両手にボールをもって投げてあてるなど，様々な投げ動作を発現することができた。



図 2 目印の上に立つ子ども

これまでの調査をもとに，攻守入り混じるゲーム（ゴール型）については図 3 のような体系化を考えた。

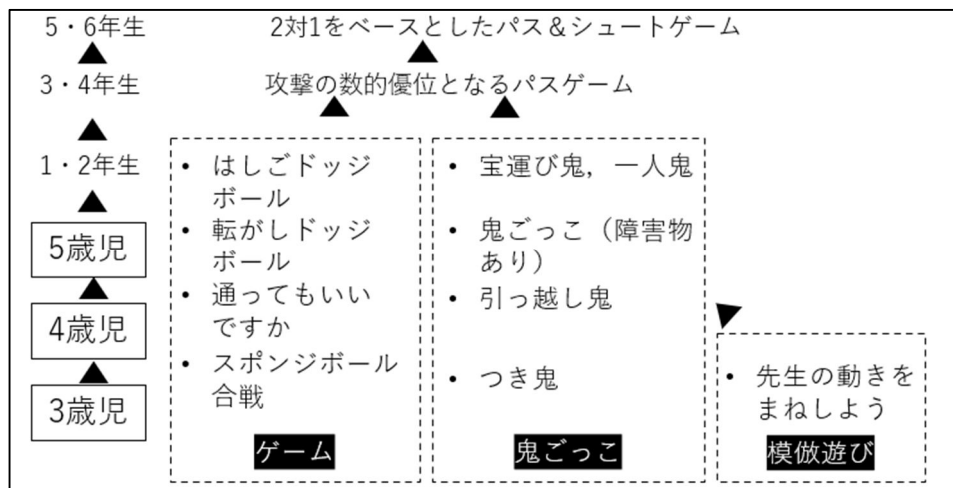


図 3 ゴール型における運動遊び・運動指導の体系化案（同学年の子どもが 3～5 名を想定）

### 参考文献

- 国立社会保険・人口問題研究所（2017）日本の将来推計人口（平成 29 年推計）。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説体育編。
- 高瀬淳也ほか（2018）極少人数学級における状況判断力の向上を目指した授業実践．北海道体育学研究，53：pp.27-37．
- 高瀬淳也・高橋正年・河本岳哉・村上雅之・中島寿宏（2022）極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察．北海道教育大学紀要教育科学編，72(2)：377-384。
- 高瀬淳也・梅村拓未・今竜一・中島寿宏（2023）2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の頻度と種類の一考察．北海道教育大学紀要教育科学編，74(1) 令和 5 年 7 月発刊予定。
- 渡辺敏明（2018）小学校体育科における運動アナログによる体づくり運動の体系化，科学研究費助成事業研究成果報告書。
- 吉田伊津美（2005）動作の理解，指導内容の理解．体育の科学．杏林書院，55(7)：507-511。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高瀬 淳也、高橋 正年、河本 岳哉、村上 雅之、中島 寿宏	4. 巻 72
2. 論文標題 A Case Study on the Frequency and Use of Fundamental Movement Skills among Children at a Small Nursery School	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要. 教育科学編	6. 最初と最後の頁 377 ~ 384
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00007114	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高瀬淳也・梅村拓未・今竜一・中島寿宏	4. 巻 74
2. 論文標題 2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の頻度と種類の一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高瀬淳也, 梅村拓未, 今竜一, 中島寿宏
2. 発表標題 2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察
3. 学会等名 令和4年度北海道体育学会第61回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高瀬淳也, 梅村拓未, 今 竜一, 中島寿宏
2. 発表標題 2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察
3. 学会等名 令和 4 年度 北海道体育学会 第 61 回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高瀬淳也・高橋正年・河本岳哉・村上雅之・中島寿宏
2. 発表標題 極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察
3. 学会等名 北海道体育学会70周年兼第60回記念学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------